

シェリーの詩の薫り

川村和夫(注)

シェリーの詩には何よりもまず薫りがある。この薫りこそがシェリーの詩の思想を支えているのではないかと思うのだが、シェリーを研究するときに一番難しいのが、この薫りと思想との関係、特にその社会改革の思想との関係である。薫りなどと言っても曖昧で何をもって薫りというかと問い返されるにきまっているが、単なるリリズムとか抒情性ともちがっていて、薫り高い官能性とも言えばいいかもしれない。ワーズワスにもキーツにももちろん抒情性はあるが、たとえば *Lyrical Ballads* はそれほど薫り高い詩集だろうか。キーツの *Endymion* は確かに全編に薫りがみち溢れているが、それでもシェリーのような社会改革や地球の未来と結びつくような格調の高い薫りとは違うような気がする。

少なくとも私にとってシェリーはまず第一に薫り高い詩人として存在する。たとえば

Music, when soft voices die,
Vibrates in the memory—
Odours, when the sweet violets sicken,
Live within the sense they quicken...

を読んだのは、高校3年か大学1年くらいの時だったと思うが、言葉がこれほど官能的な響きや薫りを持ち得ることに驚いたのをおぼえている。そのときの感覚は今でも身体のだこかに残っていて、この詩を読むたびにその

(注) 関東学院大学文学部教授

不思議な陶酔感がよみがえってくる。その後 *Queen Mab* や *The Revolt of Islam* などを読むようになってシェリーの社会改革の思想に触れるようになり、当初感じていたこの詩人の薫りとこれらの作品の思想が、どこでどうつながっているのかが私にとって最大の関心事になり、今に至っている。1992年5月にニューヨークで開かれた国際学会“Shelley: Poet and Legislator of the World”に参加した時に私が一番知りたかったのはそのことであった。



19歳のメアリー・シェリー
Mary Shelley/Eileen Biglandより

今うすうす感じていることは、シェリーの思想と女性との関係である。シェリーにとって一つの思想を追いかけることは、理想の女性のイメージを探し求めるのと同程度に肉感的なことであり、官能的なことだったのではないだろうか。もしかしたらシェリーにとって、一つの思想が命を得るためにはその思想を共有できる一人の女性が必要だったの

ではないか。シェリーの社会改革の思想が詩の中でただの抽象的な思想で終わらない秘訣がその辺にあるのではないか。シェリーの詩の言葉の薫りは実はそのことと関係があるように思われる。というのは *Queen Mab* も *The Revolt of Islam* もそれぞれ一人の女性に捧げられており、いずれも少なくともその献詩の中では理想の女性として扱われている。 *Queen Mab* の場合それは最初の妻 Harriet であり、 *The Revolt of Islam* の場合は Mary である。

1813年に *Queen Mab* を本にしたとき、シ

ェリーは妻ハリエットへの献詩 “To Harriet*****” を巻頭に置いた。これはあとで作者自身により “a foolish dedication to my late wife” として削除されるが、少なくともその時点ではシェリーの偽らざる気持ちの表現だったに相違なく、やはりあくまでもこの作品の一部と見なされるべきものである。この詩が一種のヘその緒の役をはたして、この作品と作者との間に血が通い始めるのであり、重要な意味をもっている。この中でシェリーはハリエットに次のように呼びかける。

Whose eyes have I gazed fondly on,
And loved mankind the more?

Harriet! on thine: -thou wert my purer mind;
Thou wert the inspiration of my song;
Thine are these early wilding flowers,
Though garlanded by me. (7-12)

この言葉を額面通り取るならば、*Queen Mab* はハリエットへの想いから生まれ、彼女のために自ら編んだ野の花の花輪のようなものだということになる。そして更に続けてこうも言っている。

Then press into thy breast this pledge of love;
And know, though time may change and years
may roll,
Each floweret gathered in my heart
It consecrates to thine. (13-16)

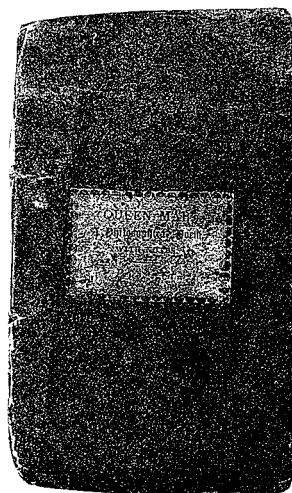
要するに *Queen Mab* は社会改革の詩であると同時に愛の詩だといっているのである。しかも野性的な薫りを放つ「言葉の花束」であることを読者に期待させるように書いてある。そのため、われわれも胸をふくらませてこの作品をひもといてみようという気になる。実際に読んでみれば期待はずれのところもあるにせよ、それでもこの献詩のお蔭で *Queen Mab* の主題がシェリーの頭の中で抽象的に生まれたものではなく、一人の女性への愛と結びついて、どこか深い意識の底からインスピレーションとなって湧き出てきたものだということが分かるのである。妖精の女王マップによって魂だけを天界に連れ去られ、地球改革の思想を吹き込まれる乙女アイアンシーに、シェリーが頭に描いた想像上のハリエッ

トを重ねて見ることもそれほど見当違いな読み方ではないはずで、実際 Reiman & Powers 編注の *Shelley's Poetry and Prose* (Norton Critical Edition, 1977) ではそのような解釈をしている。

思想的には *Queen Mab* の延長線上にある *The Revolt of Islam* (最初の題は *Laon and Cythna*) にも “DEDICATION TO MARY—” というメアリに捧げられた序詩がついていて、それは次のように始まる。

So now my summer task is ended, Mary,
And I return to thee, mine own heart's home;
As to his Queen some victor Knight of Faëry,
Earning bright spoils for her enchanted dome;
(1-4)

この長編詩はシェリーが Marlow に移り住んだ1817年の夏、約6ヶ月で書き上げられ、9月の末頃には草稿が出来上がっていた。メアリはこの詩につけた “Note” の中で、シェリーはこれをブナ林の木陰に浮ぶ船の上か、近くの山野を歩きながら書いたと言っているが、この “DEDICATION” の書き出しからは、そのような夏の薫りとメアリに対する愛の気持ちが伝わってきて、その6ヶ月の仕事の成果である愛の贈り物を女王のメアリの前に差し出しながら額づいている騎士シェリーの姿を想像するのである。そう思って読んでいくと、また次のような言葉に出くわす。



1826年発行の *Queen Mab* (当館所蔵)

Alas, that love should be a blight and snare
To those who seek all sympathies in one! –
Such once I sought in vain; then black despair,
The shadow of a starless night, was thrown
Over the world in which I moved alone: –
(46-50)

これは暗にハリエットとのことを言っているものと思われるが、ここにははっきりと自分と共鳴できる一人の女性を求めようとするシェリーの傾向が見えている。そこへ現れたのがメアリであった。

Thou Friend, whose presence on my wintry heart
Fell, like bright Spring upon herbless plain;
How beautiful and calm and free thou wert
In thy young wisdom, when the mortal chain
Of Custom thou didst burst and rend in twain,
And walked as free as light the clouds among,
(55-60)

つまりこの詩の中のメアリはシェリーにとって一人の愛する女性であると同時にシェリーの革命思想そのものの化身であり、またミュージズでもあった。そしてこのシェリーの思想の化身であるメアリは姿を変えて、Canto Iでは「朝のように美しい女」となって、またCanto II以下ではこの詩の主人公の一人である女性革命家Cythnaとなって、それぞれ重要な役割を果たすことになるのである。

ところで*Queen Mab*と*The Revolt of Islam*という二つの社会改革を扱った長編詩の間にはさまれて書かれた*Alastor*は、一人の「詩人」が夢で交わった女の幻を追いか

めて、そのために身を滅ぼす話である。この作品についてメアリは“Note”の中で自分の世界に浸った内向的な作品であり、*Queen Mab*のような社会や宇宙全体を対象にした作品とは全くトーンの違う作品だと言っている。確かにトーンは違うが、この二つの長編詩ばかりでなく、シェリーの作品全体を見回してみた場合、*Alastor*はシェリーの思想的な作品が生まれる時の作者の精神構造のアレゴリーとして重要な意味を持つのではないかと思われる。特に“Preface”の中の“His mind is at length suddenly awakened and thirsts for intercourse with an intelligence similar to itself”という表現はその意味で暗示的である。シェリーにとって思想(“intelligence”)は「交わる」ことの出来る肉体を持っていることが必要だった。現実の生活ではそれは自分と同じ思想を共有できる女性と交わることであったのかもしれないが、そのことを言葉のレベルにおいて考えれば、言葉それ自体が肉感的な薫りを持つことであった。そのような言葉を創り出すことがシェリーの詩人としての憧れであり、“The desire of the moth for the star”だったのではないか。たとえば、

And so thy thoughts, when thou art gone,
Love itself shall slumber on.

のような言葉から漂ってくる薫りは何かそういうことと関係があるのではないだろうか。

(1999. 1. 15)

<編集部より>

川村先生から、シェリーにおける思想と女性に関わる論考を頂きました。この論文の挿絵に、是非、シェリーの妻であったハリエットとメアリーのポートレイトを使いたいと思ひ探してみました。するとメアリのものは沢山出てきました(今回は、そのうち素朴なタッチの肖像画を使わせて頂きました。)が、ハリエットのものは見つかりません。

W. Courthope Formanの“Events in the life of Shelley”によるとハリエットの肖像は残されていないそうです。同書によれば、彼女は、

the tint of the blushrose shining through the lily;
her abundant hair lightbrown and beautiful as a poet's dream
などと描写されており、大変チャーミングな女性だったようです。